

日本産漆を支援する

NPO法人

壺木呂の会

I C H I K I R O

— 東慶寺 漆芸展 特集号 —

会報
第14号 / 2017年4月発行



「目次」

- 3 ― はじめに ― 日本産漆の夜明け ―
- 4 ― 東慶寺 杵木呂の会 漆芸展 「秋を楽しむ」 ―
- 7 ― 杵木呂の会 東慶寺展を拝見して
- 9 ― アジア漆工芸交流プログラム in ハノイ
- 10 ― 漆サミット2016に参加して
- 11 ― 漆サミット2016講演会
「国産漆の利用を考える」に参加して

理事長 本間 幸夫

副理事長 三好 かがり

賛助会員 木原 こずえ

賛助会員 磯井 美葉

正会員 徳山 やよい

理事 石井 昭

〔表紙〕



「杵木呂の会 漆芸展」秋を楽しむ



2016年9月17日(土)～25日(日) 北鎌倉東慶寺ギャラリーにて、杵木呂の会展が開催されました。18日(日)には、オープニングとして、会員によるトークとパーティが東慶寺書院で行われました。

〔出展作家〕 赤地友敬、石井昭、遠藤英明、角有伊、菊池麦彦、小森邦衛、坂本豊、清水由美、高橋敏彦、中島敦子、野口洋子、林宏、二重作櫻、本間幸夫、三好かがり、八代淳子、山本進也 (五十音順、敬称略)

はじめに

― 日本産漆の夜明け ―

理事長 本間 幸夫

ここ数年地球温暖化と云われ続け、ウルシの木にも影響が出るほどでした。

四季を通じて暖かい日が多かったのですが、この冬のように各地で大雪が降って寒い日々が続くと身体に堪えてしまいますが、皆様は如何お過ごしでしょうか。

昨年行われました北鎌倉・東慶寺ギャラリーでの展覧会開催においては会員の力添えを頂き、東慶寺のご尽力で講演会も行われました。一般の皆様方が多く参加して下さいり杵木呂の会の活動と日本産漆についての理解を深めて頂けたと思っています。

また売り上げの一部を、熊本地震で大きな被害を受けた益城町の2ヶ所の小規模保育園に寄贈させて頂きました。

会からのお金も少し足した寄付金10万円は、被災された保育園には本当に僅かな金額ですが、次の世代を担う子供たちのために、少しでもお役に立てて頂き一日も早い復旧を願っています。

また私達が長年提唱し続けてきた日本産漆の存続は、各方面の方々によるご尽力で、昨年、文科省

より国宝と重要文化財建造物の修復には国産漆を使うようにとの通達が出されました。

このことを受け、ここ2年ほど大規模ウルシ植栽に向け水面下で色々な動きが出てきています。じかに行政をはじめとした各方面から私に見本林の見学や問い合わせを頂くことが増えてきています。

2017年は日本産漆の新しい夜明けになって欲しいと願っています。

随分大袈裟な言い方と受け取られそうですが、もし今年から数年の内に大きな変革が起こらなければ、日本産漆の行く末に私達は希望を見いだすことが出来なくなることでしょう。

私個人としてはそのくらい大きな節目が近づいていると感じています。

私の描く今後の方向はと申しますと、次のように3つの段階に分けて考えています。

第一ステージ

- 1・植栽のための土地の確保
- 2・苗の準備

3・数年後までに優良苗の品種の特定と増産
現在のステージですが、土地の確保が一番難航しています。

第二ステージ

- 4・漆掻きの掻き子の新規養成
- 5・漆掻き鎌をはじめとした用具の準備。

特に掻き鎌やカンナ製作の記録を作り、幾つかの地域でその製作を行えるように杵木呂の会では各方面と連携を強化し、取り組みを始めています。

第三ステージ

- 6・その収穫により、文化財修理の為だけでなく、漆液価格の高騰を抑えながら安定的に一般漆器等への流通を確保し、漆器産地や地元漆産業の発展に寄与できるようにする。

今年の目標として常陸大宮市舟生に新たな植栽と、上記第二ステージを見据えて掻き鎌やカンナの製作記録などの仕事に取り組んでいきます。

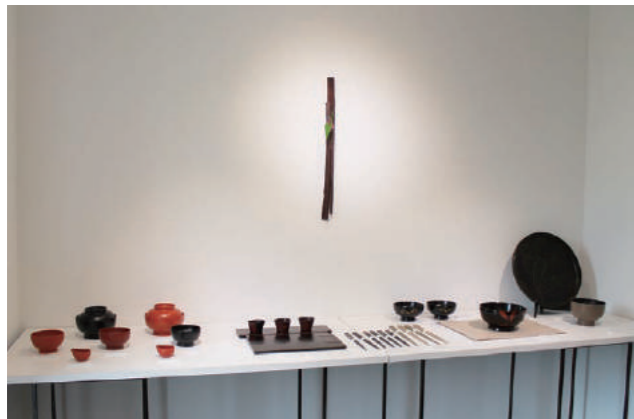
この様な仕事をさせて頂くためにも皆様方の新たなご支援を切にお願いしたいと思います。



様々な技法の作品群



東慶寺ギャラリーアプローチ



2階展示の様子



1階展示の様子



遠藤英明氏の平皿と高橋敏彦氏の花入



2階展示の様子

また、オープニングとして、会員によるトークとパーティが東慶寺書院で行われました。会場いっぱいのお客様には、作家の熱のこもった話と井上さん手作りのおもてなし料理を楽しんでいただきました。その日曆では満月、本堂にて東慶寺伝統のしつらえのもと、お月見の読経も行われました。当日は曇りで残念でしたが、晴天なら庭の小さな池に木立の間から昇った月が映るのだそうです。県指定文化財の水月観音も特別拝観させていただきました、実り豊かな会となりました。

これからも、いろいろな形で会員展を考えております。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

力いただきました。皆様には心から御礼申し上げます。東慶寺からは身近において楽しめる器を、というご希望がありました。時は初秋のころ、「秋を楽しむ」というテーマで出品をお願いしました。見て美しく、使って楽しい器が多く集まり、充実した展示となりました。壁面の花器には井上さんが境内の花を生けてくださいました。

会員展は、2014年に伊勢丹アートギャラリー、15年には常陸太田の梅津会館で開かれ、今回で三回目になります。会場の広さの関係で会員全員に声をかけられないことが残念でしたが、会員展は吉木呂の会の活動、漆の魅力を広く知っていただくよい機会です。会期中、雨模様が続きましたが、たくさんのお客様に展覧会を見て楽しんでいただけたと思います。



東慶寺吉木呂の会漆芸展「秋を楽しむ」

副理事長 三好かがり



昨年9月17日より25日まで、北鎌倉東慶寺ギャラリーにて、吉木呂の会展が開催されました。東慶寺は北鎌倉を代表する名刹で、花の寺としてもよく知られています。ご住職のご母堂、井上米輝子さんは現在特別会員として吉木呂の会を長きにわたって支援し続けてくださっています。

東慶寺のご好意で、秋の月見のころのよい時期に吉木呂の会展を開くことができました。また、DMも大きい見開きのものを作ってください、見ごたえのあるものとなりました。

今回は小森邦衛先生をはじめ17名の作家に出品をお願いし、搬入搬出、当番などの手伝いもご協力



東慶寺書院にて会場いっぱいのお客様



東慶寺 井上米輝子氏



井上米輝子氏の手作りのおもてなし料理



秋を楽しむパーティの様子



作家有志によるギャラリートーク

壺木呂の会 東慶寺展を拝見して

賛助会員 木原 こずえ

私が本間先生に初めてお目にかかったのは1966年新宿伊勢丹で開かれていた先生の個展でした。今年3月に先生から東慶寺で個展と講演会があるという案内状を頂き参加させて頂きました。その折に「壺木呂の会」のお話しを伺い、危機にある日本産漆を守ろうと17名の方で立ち上げられた会である事を知りました。

私は漆器が好きですが、漆に関する情報を新聞やテレビ等で得て、日本産漆の減少やそれに関わる職人さん達の減少をただ憂いただけでした。なので何とかして日本産漆を守ろうと頑張っていこうという様子を拝見して感動し、私にも出来る事と今年の5月に壺木呂の会の賛助会員になりました。

9月18日の東慶寺ギャラリーの「壺木呂の会漆芸展」には友人数人を誘って参加させて頂きました。まずギャラリー入り口左手に2本の漆を採り終えて切られた漆の木が展示されており、展示室には17名の「壺木呂の会」の漆芸家の方々のお月見の頃に合わせて「月」をテーマにした作品が多く展示されていました。片口や箸置きにも豆皿にも使える作品に興味がありました。月の沙漠という題のついた吸い碗の蓋は小皿にも使えそうでした。木槿

の盃素敵でした。花器もいくつかあり、花が生けてあるのは本当に小さな花が一輪挿ししてあるだけで目を引きました。友人はそのシンプルな細長い花器をかなり気に入った様でした。あけび手の花器は存在感がありました。

東慶寺広間での作家によるギャラリートークには少し時間があつたので、境内のお花を觀賞してからトークに参加させて頂きました。

司会者の方が芸術家の方は作品を作るのは得意だけれど大勢の人の前で話して欲しいと頼むと断られる事が多いけれど「壺木呂の会」の方々は皆さん気持ち良く話をする事を引き受けて下さったと仰つたので、どの様なお話が伺えるかとワクワクしました。

12名の「壺木呂の会」の方々がそれぞれの立場で日本産漆との関わりについて話して下さいました。

御自身で漆の木を植えてみたが全部枯れてしまったと話された方、日本産漆は接着力が強くヒビ割れにくい、良い匂いがある、透明度が高いから蒔絵に使う場合、色を鮮やかに保つ等のお話が

印象的でした。若い漆芸家の方、会の今後の活動で漆掻き鉋作りを映像で残そうと準備されている方もいらっしゃいました。

最後は画像を見ながら本間先生が「壺木呂の会」の活動等話して下さいました。

私は他の方々から日本産漆の良さを話された中、先生が中国産漆があつたから今も日本の漆文化が続けてこられた。又、日本産漆と中国産漆のDNAは同じで中国産漆が悪い訳ではなく、採取方法や精製、保存等にもよる。そしてそれぞれの風土によつてこそ生きると話された事が印象的でした。

友人は「壺木呂の会」の活動とクロメ会、日本産漆についてのお話しに興味を持ち、私が所属している他のメンバーにも報告してくれました。

トークの後再びギャラリーへ行きました。何人かの漆芸家の方からご自分の作品についてお話を伺う事が出来て良かったです。

パンフレットを読んだだけではわからない「壺木呂の会」の活動がこのような催しを通して、より多くの人に知って頂けると良いと思います。そしてこのような場所を提供して下さいる東慶寺の井上米輝子様に心から感謝申し上げます。



アジア漆芸展の様子



三好かがり氏作品の前に磯井美葉氏と



人間国宝、北村昭齋氏による開会式テープカット



三好かがり氏による技術公開の様子



アジア漆芸展会場日本の作品展示

磯井美葉氏と三好かがり氏によるポスター展示の様子

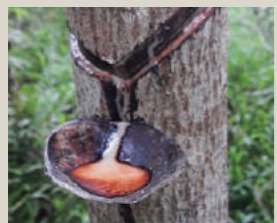


ポスター展示の様子、各国の方々と



ポスター発表をする磯井美葉氏

ベトナムの漆掻きの様子



V字に傷をつけ、漆を貝殻で受ける



貝殻から漆を集める道具



伝統的な手ぐろめの様子



漆掻き体験、鎌はキッチンナイフ

ベトナムでは早朝キッチンナイフでV字に傷をつけ、漆液を貝殻で受ける。朝のうちにヤシの葉のへらで桶に集める。手ぐろめの櫛は使い勝手がよい。

ポスターは英語と、現地で翻訳して下さったベトナム語の併記で作成されました。実際に見て、「こういう活動は素晴らしい」と言ってくださったベトナムの方がいたと聞いて、一人でもそんな方がいらしたなら、作った甲斐があったと嬉しく思いました。

ベトナム側では、漆画家の安藤彩英子さんがコーディネーターとして下さり、漆芸学校や漆画家のアトリエ訪問、螺鈿細工の村や漆の植林地の訪問見学等もありました。私自身は、作品もなく、漆が好き、アジア各地の漆を守りたいという気持ちで押しかけたのですが、各国の作家さんとも交流させて頂き、素晴らしい経験をさせて頂き、感謝しています。

2016年8月、ハノイのベトナム国立美術館で、アジア漆芸展が開催されました。宇都宮大学の松島さくら子先生が主導する、アジア漆工芸交流プログラム(国際交流基金アジアセンター・高橋産業経済研究財団助成)によるものです。

日本、ベトナム、ミャンマー、タイ、中国、韓国、台湾、アメリカ、イギリス、フランス(在カンボジア)、オーストラリアの11か国から参加があり、吉木呂の会の三好かがりさんも参加し、作品出品と技術公開をされました。

また、ポスター展示ができると聞き、会の活動を紹介するポスターを作らせて頂きました。かねて、有志の漆芸家と一般の方の寄付によって、国産の漆素材と技術を守る取組みを、ぜひ海外にも紹介したかったからです。漆の木と漆芸はアジア各地にありますが、素材に対する関心は日本ほど高くない印象があり、技術やデザインが重視される一方で、扱いやすい化学塗料がどんどん拡がりつつあると感じていました。ベトナムも漆芸が盛んですが、町のお土産屋さんの「漆器」はきらきらと色鮮やかで、天然の漆とはとても思えないものばかりです。そんな中で、天然漆、その中でも国内産の漆を保持していこうとする吉木呂の会の活動は、将来、アジアの産地でも参考になる日が、必ず来ると思います。



漆サミット2016に参加して

正会員 徳山やよい

漆サミット2016は平成28年11月3日から5日まで明治大学グローバルフロントで「国産漆の利用と国宝・文化財建造物の保存・修復を考える」とのテーマで開催され3日間参加しました。初日は開会式が行われ、森林総合研究所理事 長 沢田治雄氏、漆アカデミー会長 明治大学の宮腰哲雄先生のご挨拶の後、漆芸家 室瀬和美氏の基調講演「国産漆の利用と国宝・文化財の保存・修理」がありました。その後のシンポジウムでは、浄法寺総合支所の姉帯敏美氏「国産漆振興に向けた資源育成」、林野庁の長江良明氏「国産漆の生産の現状と課題について」、社寺建造物美術保存技術協会の荒木かおり氏「文化財建造物修復における国産漆の使い方と今後に向けて」、日光社寺文化財保存会の佐藤則武氏「文化財建造物修復における今後の国産漆利用」のお話がありました。

4日は講演会「国産漆の利用を考える」、ポスター発表、ワークショップ「国産漆を使った創作体験（蒔絵）」が行われました。講演会では吉木呂の会石井昭氏「NPO法人吉木呂の会の取組」京

都の堤浅吉漆店の堤卓也氏「国産漆の精製と今後の展望」、輪島キリモトの桐本泰一氏「輪島の創作工房が生み出す漆器」、MOA美術館館長 内田篤呉氏「漆の利用を美術教育から考える」のお話がありました。ポスター展は漆や漆器の産地の現状、縄文時代の漆、大学の様々な漆研究等いろいろあつてとても興味深く面白いものでした。最終日5日は講演会「日本の漆文化に関わる輸出漆器」のテーマで東京文化財研究所の小林公治氏「ポルトガルに伝世する南蛮漆器及び関連漆器の現況」、都立産業技術研究センターの神谷嘉美氏「海の方の漆器が伝える東西の技」明治大学の本田貴之氏「スウェーデンの南蛮漆器の特徴と科学」のお話がありました。安土桃山から江戸期に海を渡って行った漆器、当時から欧州からの注文で作られたものもあるとか、どのくらいの量が輸出されたのでしょうか。欧州航路の途中の国々にも残っているのでしょうか。

3日間、盛りだくさんでいろいろなお話が聞えましたが、何と云っても国産漆の増産が大きな課題です。各省庁間の連絡を密に、地方の森林組合や旧産地などにも情報がいきわたるようになって頂きたいと思います。耕作放棄地や里山の活用に向けて皆さんの協力は欠かせません。また国産漆が足りなくなるわけですから中国産漆について漆屋さんのお話をもっと伺いたいと思いました。

漆サミット2016講演会 「国産漆の利用を考える」に参加して

理事 石井昭

昨年の春「日本漆アカデミー」として活動範囲を広げた（漆サミット）、その再出発の第一回目が11月の初め、駿河台の明治大学で開催されました。盛り沢山のプログラムの中「吉木呂の会」の活動を紹介するコマをいただき、会の発足の経緯から主な活動と実績とを報告しました。当日はあいにく本間代表の都合が悪いため、私が代役をつとめさせていただきますました。報告内容の概略は以下のとおりです。

①1997年に17名の漆作家で発足、一人1kgの国産漆を購入して生産者を支援する活動を開始した。現在は正会員が50名までになっている。

②2009年からはウルシ苗木の植林を開始、奥久慈に見本林を造成し毎年100本〜200本継続的に植林を続け、現在約1ha/1000本までになっている。あと2〜3年で漆液の採取が始められる。ウルシ苗木の植林は他地域・組織との連携にも力を入れている、福島(09年)、輪島(12年)、石川県山中(16年)、鎌倉彫共同組合(16年)、各地域で消えつつある漆畑の復活のための苗木提供、植林支援等を行っている。

③これらの植林活動を経済的に下支えるために、09年から賛助会員制度(現在約100名)、13年からは「漆の木オーナー制度」(現在約50名/70本)を開始し、会の経済的基盤の安定に大きく寄与している。

④国産漆の良さを広く一般に知ってもらい、「吉木呂の会」の活動にもご理解をいただくために広報活動にも力を入れている。14年にはNPO法人化を記念して新宿伊勢丹にて会員展を開催、作品の展示だけではなく漆に関する専門家をお招きし、展示会場にて講演会を行った。同様の会員展は15年には茨城県常陸太田市梅津会館、16年には北鎌倉東慶寺ギャラリーにて開催している。

⑤会の重要なイベントに「クロメ会」がある。購入した漆を作家自らの手でナヤシ・クロメと言う精製の作業を行う勉強会である。漆を使いこなす上で大変重要で毎年実施して技術の向上を図っている。

⑥さらに、今後の20年、30年先、次世代以降を見据えて漆文化を絶えることなく繋いでいくため、より良質で生産性の高いウルシ苗木を開発すること、および技術が途絶えようとしている漆掻き道具作りの人材発掘、技術伝承のための活動も開始している。

以上のような紹介をさせていただく中、このイベント期間を通して感じたことは「吉木呂の会」の認知度が私が思っていた以上に高く、広く浸透していると言いうことあります。特に漆畑の造成に関しては、各地でその伝承/技術が消えつつある今、我々

最後に、このような注目と期待と裏腹に我々のパワーの限界も感じつつあります。正会員はもろんのこと、今後は賛助会員の方々にも積極的に会の運営に参画していただき「吉木呂の会」の活動を盛り上げていただきたいと切に思い、お願い申し上げます。





会報
第14号 / 2017年4月発行
- 東慶寺漆芸展特集号 -

NPO法人 壺木呂の会事務局
〒167-0052 東京都杉並区南荻窪 2-27-3
Tel:03-3334-0628 Fax:03-5930-4147
<http://1kiro.jp/> ✉ nihonsan@1kiro.jp
f <https://www.facebook.com/1kiro.jp/>